

# 象徴天皇観と憲法の交錯

— 吉田茂と芦田均を中心に —

東 健 太 郎

## はじめに

大正10(1921)年5月9日、裕仁皇太子、後の昭和天皇を乗せた御召艦「香取」は、随艦「鹿島」と共にイギリスのポーツマス港に入港した。英国艦隊はこれを満艦飾で出迎え、21発の皇礼砲で迎えた。後年、天皇が皇太子時代の一番の思い出として挙げたヨーロッパ訪問の第一歩である。当時、第一次大戦を経た欧州では、ロシアやオーストリア、ドイツ、オスマンといった諸帝国が相次いで崩壊し、殊にロシアの社会主義革命は大日本帝国の朝野にも大きな衝撃を与えていた。また、大戦後のアメリカの台頭は、大西洋と太平洋の両地域に新しい国際秩序の形成をもたらした。そうした変動の時代にイギリス・フランス・イタリア等を歴訪したこの外遊は、病弱の大正天皇に代わって裕仁皇太子が摂政、そして次代の天皇という大任を背負う前に、イギリスはじめ欧州の立憲君主制やデモクラシーを見学し、国際情勢を身近に感じる貴重な機会であった(波多野[1998])。

日本側の随員には、これまで箱入りだった21歳の皇太子の振る舞いに心配もあったが、ジョージ5世の歓迎の辞に堂々たる答辞を述べ、国王と親しく歓談する姿は一同を安堵させた。当時42歳で駐英大使館の一等書記官だった吉田茂も歓迎晩餐会の末席に連なり、皇太子の姿に強い印象を受けた1人である。吉田が岳父の牧野伸顕に宛てた報告の書翰は、「素朴思フカ儘ノ天真《御》発露」「天性ノ御美質」といった皇太子への賛辞に満ちている(吉田[1994: 614]、

T10/6/10牧野伸顕宛書翰)<sup>①</sup>。

イギリス訪問を終えた皇太子一行は5月30日にポーツマスを発ち、ドーヴァー海峡を渡ってフランスのル・アーブル港に入った。出迎えた駐仏大使館員らの中には、33歳で二等書記官の芦田均がいた。フランス語に堪能な芦田は皇太子の滞仏中ほぼ全行程に渡って随伴し、一行が大戦の古戦場ヴェルダンを視察した際は、案内役のペタン元帥と皇太子の間で通訳を務めている。パリでは皇太子が少数の随員と地下鉄に乗ってしまい、見失った芦田らを心配させる場面もあった。7月9日に皇太子の乗艦が南仏トゥーロン港を出航した時のことを、芦田は「何とも知れぬ感激に眼頭の熱くなつた」と回想し、この訪欧が「日本帝国の国威が頂点に達した時であつた」と書き記している(芦田[1986a: 52]、S20/10/20、芦田[1986a: 87])。

そうした感慨に芦田が耽ったのは、皇太子訪欧からおよそ25年の後、帝国が崩壊した昭和20年のことである。ポツダム宣言を受諾した日本は、憲法改正を含む大規模な変革の要求に晒され、昭和天皇の地位も戦犯指名問題や退位問題で激しく動揺した。戦争の道義的責任を求める声は国内においても強く、昭和20年の占領直後、昭和23年の東京裁判結審時、及び講和条約が発効する昭和27年の、都合3回に亘って天皇退位論が大きく問題化する。降伏時に日本政府が最後まで固執した国体も、共産主義の用語として禁じられていた天皇制の語が用いられ、公然とその存廃が議論されるに至った。

若き日、異国の地において多数の随員の中の一員としてのみ皇太子に接した吉田と芦田は、占領下の政治指導者として、危機に瀕した天皇制の運命に大きく関与することになった。吉田はマッカーサーら連合軍司令部(GHQ)との厳しい折衝にあたり、天皇の地位の安泰と引き換える形で新憲法を受け入れた。3度に亘る昭和天皇の退位問題に終始関係した人物でもあった。一方、芦田は新憲法の制定に情熱を燃やした人物であった。首相時代には天皇の意に反する形で宮中人事に介入し、一時はその退位を視野に入れていた。

明治憲法における元首、統治権の総攬者としての天皇が戦後憲法下の象徴に転換を遂げるにあたって、彼らの果たした役割は大きい。加えて、新しい象徴という存在をいかに遇すべきか、必ずしも自明ではなかった。新憲法下の最初期に首相を務めた2人は、自ら制定に携わった憲法の、現実の運用の問題にも直面した。そして昭和天皇も彼らの行動に大きく左右されたのである。

天皇を巡る2人の政策が時に激しく対立したことは、既に指摘されている(渡辺[1990: 138-170]、後藤[2003: 215-218])。更に近年、宮内府(庁)長官を務めた田島道治の日記や文書が発掘され、改めて当時の天皇退位問題が注目されている(加藤[2002]、加藤[2003]、加藤[2006])。ただ、吉田が戦後保守政治の始祖として常に注目を集め、その天皇観が考察される機会も多いのに対して<sup>2)</sup>、芦田を含め、吉田以外の政治家が天皇を巡って様々な行動をとったその背景や動機には、必ずしも関心が寄せられない。本稿は吉田と芦田の人生を辿りつつ、彼らの天皇観や政治行動の由来とその帰結を比較する試みである。

## 1. 戦前の吉田と芦田

### 1.1. 経歴

吉田は芦田より9歳年長に当たる(以下、猪木[1995]などを参照)。土佐の自由民権運動家、竹内綱の五男として明治11(1878)年に生を受けた吉田は、実業家の吉田健三の養子となって莫大な遺産を相続した。幼少期はいくつかの学校を転々とし、総じて漢学中心の教育を受けている。学習院を経て明治39年に東京帝国大学を卒業し、外務省に入省した。当初は主に中国在勤の外交官生活を歩み、後年には外務次官や駐英大使といった要職を占めた。

30歳の時、吉田は牧野伸顕の長女、雪子を妻に迎えている。大久保利通の次男である牧野は藩閥の係累として伊藤博文や西園寺公望に近く、特に外交官として明治大正期の日本外交に活躍した人物である。大正14年から約10年に亘って内大臣を務め、昭和天皇の信頼厚い重臣となる牧野との縁戚関係は、吉田と天皇の距離を大きく近付けた。

大正10年の皇太子訪欧は、皇室への親近感を裕仁皇太子=昭和天皇という具体的な人格とも結び付けた。同時に、大戦後の時代風潮は吉田に危機感を触発した。前述した皇太子訪欧の際の牧野宛書翰において、吉田は「社会主義無政府主義労農主義ナト欧米思想界ノ混乱ハ我民心ニモ至大ノ影響可有之」ことを心配し、「我帝室中心主義ノ国体擁護」のための種々の方策を提唱している(吉田[1994: 616]、T10/6/10牧野宛書翰)。

昭和3(1928)年からは3年近く、田中義一、及び濱口雄幸内閣の下で外務次官に在任した。政友会の田中と民政党の濱口は対中外交など政策面で好んで対比されるが、特に深刻な影響をもたらしたのが宮中と内閣の関係の差であった。田中が即位間もない昭和天皇や牧野ら宮中側近と摩擦が多く、特に張作霖爆殺事件の処理を巡って天皇の不信をかい、総辞職した経緯は有名